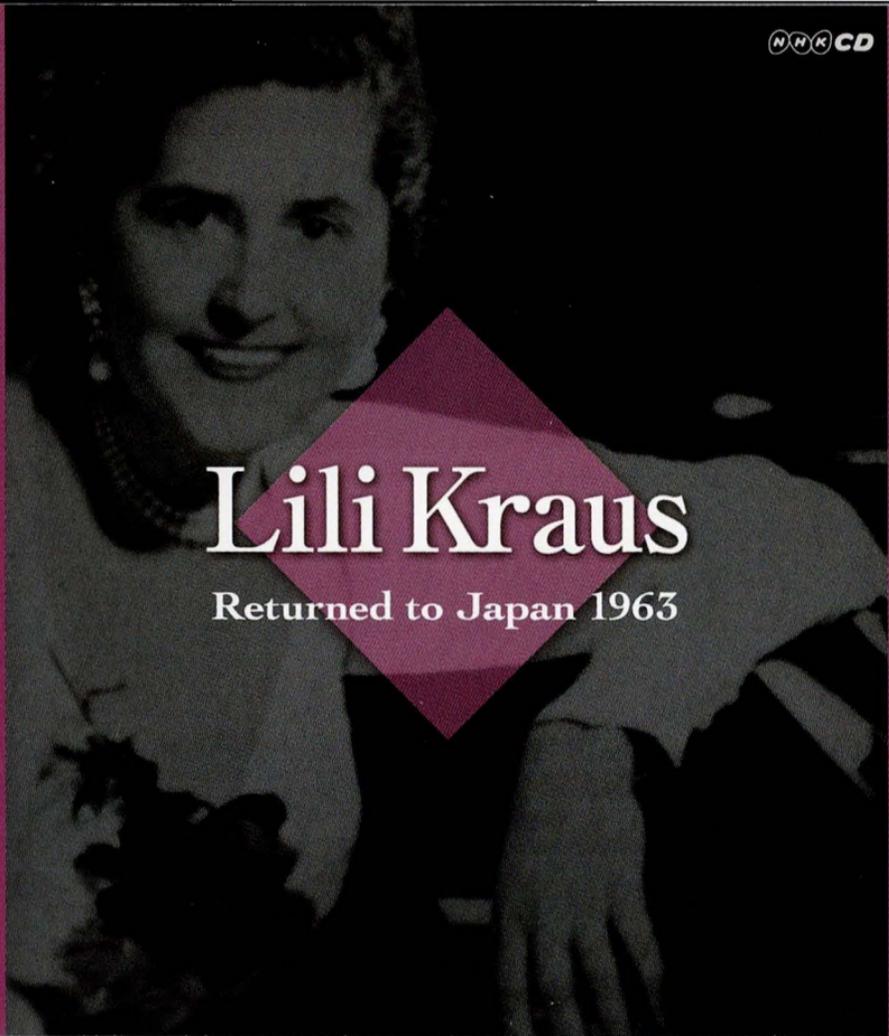


NHK CD

NHK CD



# Lili Kraus

Returned to Japan 1963

KING INTERNATIONAL INC.

KKC-2073

You people of Japan and I, Hungarian born, but world-roaming New Zealand Citizen speak the same language; our love and zealous quest for Music forms a link of indestructible friendship between us. A friendship that began during my first visit to Japan in 1936 and stood the test of hard and bitter trials of the last war.

Now, that through God's Grace the dark clouds of the past have lifted, I am deeply and joyously moved at the prospect of re-tuning to your Country: living music will re-unite us, once more, in timeless friendship.

*H. Kraus*

日本国民である皆様も、ハンガリア生まれながら世界中を歩き廻っているニュージーランド市民の私も、同じ言葉を話します。私達の音楽への愛情とそして熱心な探求は、私達の間には不滅の友情の環を形造っています。私の1936年の最初の日本訪問中に芽生えた友情は、第二次大戦の辛い苦しい試練に耐えました。

今、神の御恵みにより、過去の暗い雲は取りはらわれ、私は貴方の国へ再び戻る期待で、深くそして喜ばしい感動に満たされております。生命ある音楽は、今一度、私達を永久の友情に再び結び合えますでしょう。

リリー・クラウス

～公演プログラムより～

# Lili Kraus Returned to Japan 1963

ヨーゼフ・ハイドン Franz Joseph Haydn (1732-1809)

ピアノ・ソナタ 第52番 変ホ長調 Hob.XVI.52

Sonate für Klavier Nr. 52, Es-dur Hob.XVI.52

- 1 第1楽章 アレグロ I. Allegro [6'00"]
- 2 第2楽章 アダージョ II. Adagio [4'20"]
- 3 第3楽章 プレスト III. Presto [4'29"]

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト Wolfgang Amadeus Mozart (1756-1791)

4 幻想曲 ハ短調 K.475

Fantasia c-moll K.475 [11'59"]

ピアノ・ソナタ 第14番 ハ短調 K.457

Sonate für Klavier Nr. 14, c-moll K.457

- 5 第1楽章 モルト・アレグロ I. Molto allegro [5'53"]
- 6 第2楽章 アダージョ II. Adagio [7'28"]
- 7 第3楽章 アレグロ・アッサイ III. Allegro assai [4'18"]

8 グルックの「メッカの巡礼」による10の変奏曲 K.455

10 Variationen über "Unser dummer Pöbel meint"  
aus der Oper "Die Pilgrimme von Mecca" von Gluck K.455 [13'06"]

録音:1963年1月/NHK January, 1963 at NHK

※一部お聴き苦しい箇所がございますが、マスターテープ劣化に起因するものです。予めご了承ください。



～公演プログラムより～

## ■ リリー・クラウスを迎えて

リリー・クラウスがくるときいて、その昔のことが思い出された。もう4半世紀も前の昭和11年(1936年)、名歌手シャリアピンにつづいて、クラウスとヴァイオリニストのゴールドベルクが同行して来日した。

演奏は名声に背かず、気品ある優美なもので感銘深かったが、その後、南方にいったら、彼女がジャワの収容所に捕えられているときいて驚いた。無力の身では、美貌な芸術家が痛められないようと、陰ながら祈るばかりだったが、戦後またその活躍を知るにつけ、もう一度彼女を暖かく迎えてあげたいと、そんなことを思ったこともある。

その彼女がくる。もう50なかばである。

近年ますます円熟したときから、往年にまさる好演を示すにちがいない。期待に感概をそえ、公演の日を待ちながら。

宮沢 縦一

リリー・クラウスの名を聞いただけでもある雰囲気を感じられる。それほどかの女は気色と風

格とをもった関秀ピアニストである。

日本でヴァイオリンのシモン・ゴールドベルクと組んで二重奏を聴かせてくれたのは1936年であった。いざさかも自己を外に出さずに、ひたすらモーツァルトのまたベートーヴェンのなかに沈潜して実に清潔に演奏したクラウスのピアノは、ゴールドベルクの印象が薄れてもいまだに記憶が鮮やかである。一音一音ははっきりしたタッチで清純に弾くクラウスの演奏様式はモーツァルトにとくに適しているし、またシューベルトがこの上なく美しい。繊細で透明なまた柔らかさにとんだクラウスの弾くモーツァルトとシューベルトだけは、掛替えない至芸である。

クラウスはもう54歳になった。われわれが日本で聴いたときはまだ30歳前であったし、今度の戦争では日本軍の捕虜となって3年間も苦勞した。現在かの女がどんな風に日本を考えているだろうか。他の芸術家を迎えるとは違った心持で暖かく遇したいものだと思う。

レコードで聴くクラウスのハイドン、モーツァルト、シューベルトはますます円熟して诗情が加わっているし、バッハもベートーヴェンもまたバルトークも想像力がゆたかである。クラウスは来日演奏家中もっとも期待できる、音楽性のゆたかなピアニストの一人である。

村田 武雄

リリー・クラウスは久しいこと、日本にあこがれていた。こんど、どんなによろこんで来ることだろう。女史の名はわれわれにとってもなつかしい。私は2・3年前、知人を介してロンドンに住む女史から、日本の演奏旅行を切々と望む長い手紙をもらった。

20数年前、ヴァイオリニストのシモン・ゴールドベルクとともに来日したとき、感覚と知能のすぐれた演奏に深い感銘を受けたものである。その印象はこんにちなお忘れられない。

戦争中、南方で、女史が日本軍の保護のもとに当時のいわば文化工作に協力していたことは有名な話である。そして、新聞を通じて語った女史の言葉は「こちらには適当なピアノがなかったのですが、日本軍から送っていただき、感謝感激でいっぱいです。私は日本を愛しています。一日も早く日本へ行きたくてたまりません」ということであった。

戦後、女史の弾くモーツァルトのピアノ協奏曲第12番イ長調と第18番変ロ長調のレコードをきいた私は、いまでも一番好きな演奏のひとつとして大事にしている。モーツァルトにうつつけの美しい、張りのある音、そしてのびのびと、しかもこまやかな表情でひく活気は昔と少しも変わらないどころか、円熟した独奏家の容貌を示している。いつきいても、うまいなあと感じさせる清潔さと暖かさをもっている。これが、この人の音楽の身上であろう。

野呂 信次郎

～公演プログラムに掲載された楽曲解説～

### ハイドン： ピアノ・ソナタ第52番 変ホ長調 Hob. XVI. 52

ハイドン(1732-1809)のピアノ独奏曲は、現在ではあまり演奏されないが、それでもピアノ・ソナタだけでも約50曲を数える作品がある。

今夜演奏される変ホ長調のソナタは、ハイドンの作品目録を整理出版(器楽編・1957)したホボーケンのソナタ・ナンバーによると、第52番(52曲中)に当たる作品で、1794年に作曲されたもの——ハイドンのピアノ・ソナタ中、もっとも親しまれている曲の1つだが、かつては1798年12月の作といわれたり、第1ソナタと呼ばれたり、また通称では作品82として数えられたりしていたが、現在では、作曲年代も確定的な結論がでて、1794年とされている。

交響曲や弦楽四重奏曲などの分野に示したハイドンの実り多い業績にくらべると、ピアノ曲の多くは、内容的にも簡明にすぎたり、ピアニスティックな効果に乏しかったり、色彩感が現在のピアノに向くものとして生きて来なかったりするなど、あまりとりあげられないようだが、そのいくつかは、いかにもハイドンらしい求心的な密度の濃さを示しており、この変ホ長調のソナタなどは、もっともすぐれた曲の1つ、晩年のハイドンの円熟を物語る

ものが多分に含まれている。

第1楽章はアレグロ、変ホ長調、重々しいひびきの力強い動機と、やさしい表情の流暢な動機の対照をみせる第1主題と、なめらかに流れる第2主題にもとづいて、手なれたハイドンのソナタ書法をみせる楽章である。第2楽章は豊かなメロディをもつアダージョの中間楽章で、簡潔ながら透明なひびきをもち、いくぶん表情の変化をみせるところがきわだっている。第3楽章はプレスト、ソナタ形式の終曲、軽快で歯切れのよい第1主題と、動きにとんだ第2主題をもつが、かなりダイナミックで、氣迫にあふれたフィナーレをなしている。

### モーツァルト： 幻想曲 ハ短調 K.475 ピアノ・ソナタ第14番 ハ短調 K.457

モーツァルト(1756-1791)は、1781年からザルツブルク大司教と喧嘩別れして生まれ故郷をあとにし、ウィーンに定住することになったが、マンハイムやパリで作った一群のピアノ・ソナタ(K.309-311、K.330-333の7曲)からほぼ6年をへだてた1784年、K.457のハ短調ソナタを書いて、ウィーン時代のピアノ・ソナタの皮切りとした。彼は、この頃までは数曲ずつまとめてこの分野の作品を生んできたが、ウィーン時代には、それ

が散発的になっていったのであった。しかし、すでにすっかり円熟しきっていたモーツァルトだけあって、それぞれの意味できわめて充実した作風をみせている。

ハ短調K.457のソナタは1784年の10月に作曲されたが、モーツァルトは1785年5月に作った同じ調性の幻想曲(K.475)とあわせてこのソナタを出版し、彼の弟子であったテレゼ・フォン・トラットネルン夫人に捧げている。サンフォワがいうように「モーツァルトの幻想曲は、ほとんど何かの前奏曲として書かれたもの」となす説を、もっとも端的に立証する1例が、このハ短調の幻想曲とソナタであるといえよう。この2曲を、今夜のように組み合わせる演奏する例は、現在でも非常に多くみうけられるところである。

幻想曲は、その名の通り、ここでもまったく自由に即興的なびやかさのうちに、一種独特の緊迫感をもりあげ、気迫にとんだ表現をみせている。アダージョ、ハ短調のユニゾンで起る不気味な動機に、ふっと吐息をつくようなやさしい動機が応えてはじまる。モーツァルトらしい転調の妙をみせて移ろい、やがて二長調の優美なメロディ、そして突然アレグロの激しい部分、アンダンティーノ、変ロ長調の軽やかな感触など、まったく気まぐれなファンタジーをまきちらして、最後にアダージョの冒頭部分が簡略化されてよみがえって

くる。

この幻想曲よりひとし早く作曲されたハ短調のソナタも、先行されて演奏された幻想曲にもまして、一見ベートーヴェン風の激しく充実した気力、おどろおどろしい不気味な迫力がみなぎっているが、しかもそこにモーツァルトらしい流暢でふくやかな個性が生きていて、彼の20曲にちかいピアノ・ソナタのなかでも、もっとも内容の実った傑作の1つとみなされている。

第1楽章はモルト・アレグロ、ハ短調。幻想曲の冒頭と同じく、対立する性格の動機を組みあわせた、説得力の強い第1主題と、短い起伏にとんだ第2主題によるソナタ形式。展開部はややあつけないが、全体として激情と不安の交錯する充実感が迫ってくる。

第2楽章はアダージョ、変ホ長調。激動のあとにくる諦観とでもいおうか、一抹の和やかさの漂うひとときである。第3楽章は、ソナタ風要素を加味したロンド形式のフィナーレ。アレグロ・アッサイ、ハ短調。第1楽章と同様、いやそれにもまして、緊迫した空気を伝えてくる。モーツァルトの作品のなかで、このような気力の充実を求めた例が、果してあったらうかと思わせるほど、緊張した求心的な迫力をもっている。最後は低く重苦しく、しかも力強い終結。

寺西 春雄

## グルックの「メッカの巡礼」による 10の変奏曲K.455

ハ短調の幻想曲K.475とソナタK.457の間にあたる1784年8月にウィーンで作曲された。主題はグルックのオペラ「メッカの巡礼」中のパスのアリア「愚かな民が思うには」。もともとは1783年3月に、ウィーンで皇帝ヨーゼフ二世の臨席するコンサートで、同じく列席していたグルックに敬意を表し、その主題に基づき即興で変奏したものを、1年後に記憶に基づき記譜した。

ト長調、2分の2拍子の主題による10の変奏曲で、それまでのモーツァルトの変奏曲よりも構想が雄大になり、ベートーヴェンを先取りしたような様相を呈している。ことに最後の第10変奏は、ソナタ形式のようにさえ見える充実ぶりである。

Y.M

## ■リリー・クラウスというピアニスト

野村 光一

われわれは昔からリリー・クラウスの名を知っている。第二次世界大戦の直前に、ヴァイオリニストのシモン・ゴールドベルクと共にわが国を訪れ、二重奏をやって好評を博したからである。その後二人はジャワの演奏旅行中日本軍に捕われ、軟禁されたことでも名高い。こんな古い話はわたくしどもに不愉快な記憶しか催させない。だが、SP時代のコロムビア盤に残っているゴールドベルクとの共演による7曲のモーツァルトのソナタと共に、彼らの来日演奏は、日本の歴史にとって最も暗い時代に、一脈の光明を齎したことになって、いまだに忘れ難い思い出となっているのは、ただわたしだけではないであろう。

クラウスは戦後ゴールドベルクと別れて独奏家として立った。その方の名声も輝かしいのだが、わたしは彼女の演奏をレコードでしか知らない。独奏している曲は、ゴールドベルクとの共演時代と同じく、モーツァルトやハイドンのごとき「クラシック」が多い。そしてまたこのような方面に彼女が才能と特徴をもっともよく発揮していることは疑う余地もないところである。それは、彼女のタッチ・テンポ・リズムの基本感覚はいうに及ばず、演奏全体のスタイルがクラシックに本質的に適合しているからではなかろうか。

クラウスというピアニストはチェコとハンガリーの父母のもとで、ブダペストに生まれている。教育はブダペスト音楽院で受けたが、20歳のときには、優秀な才能のゆえにもウィーン音楽院のピアノ教授になってしまった。こういう環境からすれば、音楽家がどのような修練を受けて、どのような成長をしてゆくかは、およそ見当がつくものである。だいたい、ハンガリーやウィーンなどというところは、今でこそときたま反動的な異端児が出現はするが、一般の風潮としては、むしろアカデミック「クラシック」である。バルトークやシェーンベルクのような極端な連中が現れたりしたのは、むしろ厳格な保守主義に対する反動であったのではなかろうか。作曲がすでにそうである以上、演奏はなおさらのことだ。クラウスは、殊に女性であるだけ、なおそのような組織と環境の中で厳格に教育されたと思わずにいられない。これが彼女の美点であり、特徴であろう。殊に、近頃はそのような教育を受ける人たちが少なくなってきているからでもある。

クラウスは立派な指先の訓練を受けているようだ。彼女の音は実に明確で、どんなに速く弾かれても、その一つ一つがはっきり聞こえてくる。これは丁度真珠の玉を沢山ころがしてみても、そのおのおのがはっきりして、決してぼやけてしまわないのと同じなのだ。こういうタッチの教え方は、

指先を固めることに専念するという昔前のピアノの教授法によく見かけたものである。だから音の一つ一つが確然とし、またそれに磨きをかけることから、美しい音色も得ることになるのだ。だが、その音色はすくなくとも非常に変化がある現代的な音色とは違うのではなかろうか。わたしに言わせれば、それは一つの美しい音色に集中するというのであるのかも分からない。けれども、こういう明快な音は特にモーツァルトのようなクラシックに適することになる。

何はともあれ、この種の音はクラウスばかりでなく、先般来日したバドゥラ＝スコダなどにも何処か共通したところがあるように思われてならない。また古くは、これもウィーンで活躍していたザウアー系統のピアニストたちにも見受けられたところであった。

クラウスのテンポやリズムもやはりモーツァルト風である。あまりのびちちみがない弾き振り、いわばイン・テンポに近いやり方で歌わせたり、陰影をつけたりしてゆく方法は、決してロマンティックだとは言えなからう。もちろん、彼女がロマン派の作品を弾く場合にはのびちちみも出てくるが、それには限度があるようだ。とにかく、こういう演奏には音楽としての清潔さや高貴さが——その人が音楽的な人間ならば——出ているのは自然の理である。殊に、女性であるだけ、

男性には及ばぬ優美さもそれに手伝うに違いない。クラウスという女流ピアニストはそんな人だ。ピアノの演奏が最近だんだんロマンティックでなくなり、そしてメカニックな意味で現代風になりつつある折柄、彼女のようなスタイルのピアニストの存在は現代主義に一脈通ずるものがあると同時に、現代主義に欠けた一面を補っているだけ貴重なのである。

～来日時の記事から～

## ■伝統にたいする深い洞察 リリー・クラウス 寺西 春雄

1963年も海外演奏家の来日は、かなりにぎやかに、しかもますます充実した顔ぶれが予定されているようだ。春早々(三月頃まで)に日本を訪れる人(及び団体)に限定してみても、ピアニストでは待望のリヒテルをはじめとして、再度来演のオポーリンとリリー・クラウスが顔をそろえている。

二度目の来日とはいっても、リリー・クラウスが前にきたのは、ヴァイオリンのシモン・ゴールドベルクといっしょに、ヴァイオリン・ソナタを演奏するため、いまから27年前1936年のことだった。当時28歳のクラウスは、水もしたたるばかりの若さを舞台いっぱいにふりまいて、やはり若々しかったゴールドベルクと、驚くほど鮮やかな、イキのあったアンサンブルをきかせてくれた。戦前から現在にいたるまでの間に、僕がきいたすべての演奏家のなかで、どういうものか、この若い二人の音楽家によるソナタが、いまだにまなましい印象で脳裏によみがえってくるのも、そのころまだ16歳になったばかりの僕の幼稚な判断によるものとは、いちがいにいいきれぬものがあったと思う。

戦争中は、世界演奏旅行の途次、たまたまインドネシアで日本軍の進攻にぶつかり、終戦まで日

本軍の捕虜収容所に起き伏する破目におちいったが、4年前の訪日がいよいよ、比較的優遇され、特にピアノの使用も許されはしたものの、苦難の日々をおくった点では、他の収容者たちと変りはなかった。

終戦後約3年ちかくを、オーストラリアやニュージーランドですごしたクラウスは、その間英国籍をもつようになり、1948年、40歳の働きざかりで、ヨーロッパに帰ってからは、演奏会に、レコーディングに、はなばなしい活動をくりひろげることになるのである。それからすでに15年、彼女も55歳を迎えるわけだが、欧米の音楽界にあって、特にモーツァルトやシューベルトの演奏にかけては、押しも押されぬ定評があり、その権威として、広く実力を認められている。また、ブダペスト生まれ、その地の音楽院でバルトークやコダーイに師事、さらにその後ウィーンでシュナーベルの指導を受けただけあって、ハイドン、ベートーヴェンにもすぐれた解釈を示し、バルトークの作品の演奏家としても、第一級の折紙がつけられている。

こうして、定評のあるお得意のレパートリーから考えてもわかるように、「同じ根から生えてた二本の幹」といわれる古典派音楽とロマン派音楽の特性を、その本質において適確にとらえていること、女性らしいこまやかな神経と伝統やスタイルにたいたいた深い洞察を備えていること、大きく曲のフ

レーズを生かす豊かな音楽を身につけていることなどが、リリー・クラウスの演奏を支える大きな特質となっているのである。

55歳といえば、外人演奏家にとっては、もっとも脂ののりきった年齢、果してどのような充実した演奏をみせてくれることか、まことに楽しみである。

[公演日程]1月24日 東京文化会館、

26日 日比谷公会堂、

2月 1日 大阪毎日ホール、

4日 福岡電気ホール、

5日 京都公会館、

11日 札幌市民会館

音楽の友 1963年1月号「日本を訪れる人たち」

#### ■ 約束果たしたクラウス女史、 曲目変え中村絃子と連弾

1月21日に来日した女流ピアニスト、リリー・クラウスは、26日の来日第2回公演の曲目を一部変えた。シューマンの「交響的練習曲」を外し、代りにシューベルトの「6つのポロネーズ」と「フランスの主題による変奏曲」の2曲を加えたのだが、いずれも1台のピアノを二人で弾く四手用の作品だ。これはアメリカで知り合ったピアニスト中村絃子との約束を果たすためであった。

リリー・クラウスは、昨年9月から10月にかけてテキサス州フォートワースで開催された「ヴァン・クラ

イバーン国際ピアノ・コンクール」の審査員をつとめたが、その時日本から弘中孝、中村絃子、河野元の3人が参加、弘中第八位、中村第九位という成績をおさめた。当時中村絃子は本選会の朝、急に発熱して途中で演奏を棄権した形になってしまった。これを知ったクラウスが「本当に不運なことでした。何とかしてなぐさめてあげられればと思い、私が日本へ行ったら一緒に演奏をしましょうと約束をした」のだった。曲目の変更はこの約束を守るためのもの。

クラウスと日本の縁は深く、27年前にヴァイオリニストのシモン・ゴールドベルクと一緒に来日したことがあり、第二次大戦中はインドネシアにいたため「日本軍に抑留され三年間をジャワの収容所で過した。奥田という兵隊（オルガニスト奥田耕天）に親切にしてもらった」ということだ。

音楽の友 1963年3月号「内外トピックス」



■座談会 大木 正興  
中村 洪介  
菅野 浩和

大木 24日、二十年余前に日本へいちどきて、二度目の来日なんですがりリー・クラウス。どういうわけか、彼女は日本人に憧れられてきた人ですね。一日おいて26日にもやりましたし、2月には協奏曲をひくので再び抜くことになる。ともかく第一印象だけでも、想像していたとおり、独特なピアニストですね。

中村 メカニックはほとんど完成されているし、端正なスタイルの中にほのかなリリズムを漂わせています。この限りでは申し分ないピアニストですが、作曲家が感じた人生の深奥の部分、演奏家の人生観に照応して剔出してみせるということに期待するならば、その期待は裏切られるかもしれない。

菅野 中村さんと考えが違う。端正という言葉にひっかかる。音を大切に、女性らしい繊細な感覚で扱っているが、演奏スタイルとしては独特の詩情があるから、

モーツァルトも自分のモーツァルトにしている。端正とは反対の面がある。

大木 たいへん感興的ですね。

菅野 同時に即興的です。オポーリンの厳然たる作品像とは対照的です。ですからモーツァルト、シューベルトをあんなに楽しく自分のものとし、きれいな音で流麗、典雅にひいてくれたのは、やはり第一級です。しかし、シューマンのようにダイナミズム、表現の多様性が必要な曲になると、力ばって不自然さがでてしまった。パルトークは、ハンガリー出身ということ抜きにして、素朴な味を淡々と出していた。

大木 現代風に見得をきる人でもなく、コンクール型のバリバリ型でもない。暖かい空気の中でのいかにも幸せに過ごした過去の音楽家ですね。こういうあたたかい雰囲気をもつ人は、現代では求めようとしてもちょっと得られないんじゃないですかね。

中村 いかにも良き時代の良き演奏家を偲ばせます。

音楽の友 1963年3月号

～来日時のインタビュー～

■わたしも着物きたい  
—日本びいきのリリー・クラウス—

きく人 蘂科 雅美

『日本に来て、たったひとつ残念なのは、戦前の皆さんは男のかたも女のかたもよく着物をきていらっしやっただのに、それが今度はいっこう見当らないことです。私としてはぜひ着物をきて頂きたいし、自分でもいちど和服姿になってみたい気持ちです』

記者会見で来日の喜びを語ったあと、すぐこう言い足したりリー・クラウス女史は、大阪のリサیتال(1963年2月1日)が終ってから、日本楽器の大阪支店長の招待でスキヤキをたべに行った時にも、座敷に上ると仲居さんたちをしげしげと眺めて、どうして日本の婦人はこんなに優美に、まめまめしく、器用に、しかも高い誇りをもって働くことができるのでしょうかと心から賞讃する。

ご主人のマンデル博士は6年前に死去して、戦争中に親子四人ジャカルタで不幸な抑留生活をおくった。そのときの男女二人のお子さんは、今ではそれぞれ結婚して、どちらも1歳半と3歳の子供持ちとのこと。27年前に来日したときには26歳の妙齢の美人(本当に……)であったクラウス女史は、もはや四人の孫たちの良きおばあちゃ

さまというわけだが、女史はホテルで見た浴衣の寝巻がすっかりお気に召して、息子と娘婿の土産にぜひそれを買って帰りたいと大変なご執心であった。

大阪から京都に向う自動車のなかでも、ファンタスティック、チャーミング、ワンダフルの感嘆詞の連発で、それは半分こわれかけた瓦ぶきの日本家屋にも、ちっぽけな田んぼにも、小じんまりした竹藪に向っても発せられる。車が京都市内に入ると赤い色をしたシントー・ゲート(鳥居)はどこにあったかと思案していたが、それを八坂神社で発見したときには、在りし日にマンデル博士と歩いた懐しい思い出に半ば涙ぐんでいた。

近頃、日本びいきは珍しくないし、日本に来た外国人の大半が日本に夢中になるが、彼女はそんななかでも筋金入りの本格派である。そして古き日本に憧れ、急速な近代化をみせる日本に「世界中どこでも……」と淋しそうに眼を向ける。私が女史の生まれ故郷のブダペストの景観をほめそやすと、『でも戦前のハンガリーはもっともっと良かった。ドナウ川を間に挿んだブダペストの自然美は今も変りはないんでしょうが、昔のハンガリー人の優雅と謙虚(ボライトネス)と陽気さは失われてしまいました。いえ、ブダペストのあの丘(つまり同市のブダの部分)の美しさだって以前はもっともっと素晴らしかったのです』と

言って、世の移り変わりを悲しむ。「古くよい時代のヨーロッパを代表するピアノ」(大阪毎日新聞の渡辺佐氏によるクラウスの演奏評)という言葉は、クラウスの演奏をきいたすべての人の心に通じる感想と思うが、彼女のそうした芸術性はそのままその人柄をいい当てているのである。

しかし誤解のないように……。クラウスは音楽に関して、現代の日本に限りない驚異を抱き、その優秀さを口をきわめて賞讃する。とくに日本の若いピアニストに対する心酔は、まるで恋文の文句のように熱く、それを要約すると、まだ少女といえる年頃の日本のピアニストたちが音楽というものを、技巧の面でも解釈の面でも“本筋”を把握していることについての喜びで、たとえばリストの楽曲をその本来の姿であるスピリットと炎(ファイア)とエレガンスをもって演奏するのは、ハンガリー人よりもむしろ日本の彼女たちだと力説する。

世界の演奏会場で最上のものはどこか、という私の質問にも女史は「第一は上野の文化会館、第二はボストンのシンフォニー・ホール、京都その他の地方都市はまだ知りませんが、大阪の毎日会館も独奏会にはとても良いホールです。東京の文化会館はロンドンのフェスティバル・ホールよりもずっと落着いて弾けるし、外観も芸術的です」とほめそやしていた。日本の演奏会のプ

ログラムやレコードのパンフレットのデザインが「信じられないくらい芸術的だ」というのも女史の主張で、「今度私のプロスペクト(演奏家の経歴その他を載せた写真入りのパンフレット)を印刷するときには、ぜひ日本で作ってもらおう」と眼を輝かせていた。

「私が前に日本に来たときには、それまで女性のピアニストが一度も訪れていなかったもので、きっと皆さんが感心してくださったでしょう」と語るクラウス女史に対して、私は日本で本当のデュエット、つまり室内楽の味というものはじめて味得できたのがクラウスさんとゴールドベルクさんの二重奏であった。今でもその時の楽しさと感激は忘れることができないと伝えて、四年前にプラハでゴールドベルク氏のオランダ室内楽団の演奏会にめぐりあったことを付け足すと、「ゴールドベルク氏と私で二重奏のLPを作る希望は方々のレコード会社から出されていて、私も大変乗り気なのですが、ゴールドベルク氏の夫人がやきもちをやいて、やらせてくれないのです。本当に残念ですが、どうにも仕方ありません」との答弁であった。第一回の来日当時から私たちは「ゴールドベルク氏とクラウス女史は夫婦なのだろう」と勝手な想像をしたことがあったが、音楽の上で二人があまり仲が良いことから出たそうした無責任な噂が、日本ばかりでなく欧米

でも流布して、それがゴールドベルク氏の夫人の心を悩ましたのかもしれない。

ところでリリー・クラウス女史のレコードのことだが、ご承知のとおり現在わが国で発売されているのは、女史が世界最良の演奏会場のひとつに挙げたボストンのシンフォニー・ホールでモントゥー指揮ボストン交響楽団と録音したモーツァルトのピアノ協奏曲第12番イ長調K.414と第18番変ロ長調K.456の2曲のビクターだけだが、近くコンサート・ホール・ソサエティからベートーヴェンのピアノ協奏曲第3番とロンド変ホ長調が頒布される。

『そのステレオは1961年の夏の録音で、アムステルダム・フィルハーモニー管弦楽団というのは実質的にはアムステルダムのオランダ放送交響楽団のことです。以前ハイティンクが指揮をしていたオーケストラですが、非常に優秀です。指揮者のジャンフランコ・リヴォリはイタリア人で、40歳ぐらいでしょうか。コンサート・ホール・ソサエティのディレクターのダヴィッド・ジョセフォヴィチ氏は稀にみる慧眼の士で、まだ国際的に広く名前の売れていないアーティストをどしどし起用しますが、彼のおメガネに適った演奏家はひとり残らず素晴らしい才能の持ち主です。リヴォリはその中でも飛び切り上等でしょう』

「私が最初にコンサート・ホールに入れたLP

はシューベルトのピアノ曲集で、それは2曲のソナタのほかに日本でもあちらこちらでアンコールに弾いたレントラー舞曲を含む幾つかのピアノ小曲が録音されています。あのレントラー舞曲には、ヨーデルのようなフシが出てきたでしょう。遠くからこのレコードも日本でプレスされると思いますが、ぜひきいていただきたいひとつです』

『フランスのディスコフィル・フランセーから、私が弾いたモーツァルトのピアノ曲集(7枚)やボスコフスキーさんと合奏したヴァイオリン・ソナタ集(8枚)が出ていたことは、あなたがプログラムのなかに書いてくださっていますが、モーツァルトのピアノ三重奏曲集もぜひ忘れないください。ディスコフィル・フランセーのLPはアメリカでハイドン協会のレーベルで出ていましたが、RCAやコロムビアのような大会社がLPの値下げをしたあおりをくらって潰れてしまいました。私の印税も相当の金額が未回収になっていますが、文化的に非常に立派な仕事をしたレコード会社でした。最近EMIがディスコフィル・フランセーの株を買ったそうですから、そのうち私のレコードも復活されるでしょう』

『アメリカのエデュコに私が入れたレコードのことも、あなたが書かれたのを訳してもらって読みましたが、あのクレメンティやクーラウのソナチネ集は自薦できる会心の演奏です。パッハの

小品集も自慢していいでしょう」

「自分の芸術について、つまりピアニストのクラウスは何事にも厳格で妥協しませんが、音楽から離れた物事に関しては誰もがカムフラブルであるように仲良くしていきたいと、いつでも希っています」

—と言って、ハイヤーの真ん中の席に足を縮めて同乗していた私のことを心配し、お互いに譲り合って皆が楽ししていないとかえって気づまりだと、いかにもおぼさまらしい親切な気遣いをするクラウス女史である。

ジャワで抑留されていた三年間に、日本の軍人、軍属から決して手荒な取扱いを受けなかったことは「サンデー毎日」2月10日号の記事で確信することができて、本当によかったと安堵しているが、当時インドネシアでクラウス女史の家族を蔭にひなたにかばってくれた作曲家の飯田信夫氏、NHK放送文化研究所の青木正氏、オルガニストの奥田耕天氏の諸先輩にここで私も心から感謝の言葉を述べさせていざう。女史は、私がひそかに心配していたような日本への恨みは露ほども持ち合わさず、今回の再度の来日もまるで里帰りか何かのように感じている。

「しかし近年は、演奏旅行に追われてゆっくり勉強をする暇がなく、日本でそれを取り返すスケジュールを立ててきたので、方々を観て廻った

り日本料理をたべて廻る時間がないのです。この次は演奏回数もうんと少なくして、おおいに観光気分を味わいたいものです」

音楽の友 1963年3月号

【取り扱いのご注意】 \*ディスクは両面共、指紋、汚れ、キズ等を付けないように取り扱って下さい。 \*ケースを破損しないように、ディスクは中心の凸部を押しながら静かに取り出して下さい。 \*ディスクが汚れたときは、メガネふきのような柔らかい布で内周から外周に向かって放射状に軽くふき取って下さい。レコード用クリーナーや溶剤等は使用しないで下さい。 \*ディスクは両面共、鉛筆、ボールペン、油性ペン等で文字や絵を書いたり、シール等を貼付しないで下さい。 \*ひび割れや変形、又は接着剤等で補修したディスクは、危険ですから絶対に使用しないで下さい。 【保管上のご注意】 \*直射日光の当たる場所や、高温・多湿の場所には保管しないで下さい。 \*ディスクは使用後、元のケースに入れて保管して下さい。 \*プラスチックケースの上に重いものを置いたり、落としたりすると、ケースが破損し、ケガをすることがあります。